

光明寺だより

第97号
浄土真宗本願寺派
光明寺

〒793-0030 西条市大町550

TEL 0897-53-4583

心に残る詩

心のスイッチ 東井義雄

人間の目は 不思議な目
見ようという心がないと
見ても見えない
人間の耳は 不思議な耳
聞こうという心がないと
聞いていても聞こえない
頭だっそうだ
心が眠っていると
頭の働きをしてくれない
まるで 電灯のスイッチみたいだ
仕組みはどんなに立派でも
スイッチを入れなければ
光は放てない



彼岸会法座

3月23日(金)

おつとめ 午後1時30分

おはなし 午後2時

【講師】 大阪・法栄寺前住

小林顯英先生

一口法話

キリスト教から浄土真宗へ



ご自身の信仰をキリスト教から浄土真宗へと転じていかれた菟女子短期大学の名誉学長であられた河村とし子（1921～2013）先生をご紹介したいと思います。

先生は兵庫県明石市の、敬虔なクリスチャンの家庭に生まれ、地元の学校を卒業後、東京女子大学に進まれます。そこで今は亡き夫、河村定一さんと知り合われ、生涯クリスチャンとして生きるということ、夫の実家で暮らさなくてもいいということ、条件に結婚されます。ところが、戦争が次第に激しくなり、空襲を避けるため夫を東京に残し、子供二人を連れて、夫の実家に疎開されるのです。

実家は山口県の萩市にほど近い山間の村にあり、年老いた両親が家業の農業を営んでいました。

「こんな思いがけないところに来たのはキリスト教を広めよという神様の思し召しに違いない」と思い込んだ先生は、クリスチャンとしての使命を果たすべく、その日から毎晩のように両親の部屋へ出向いてはキリスト教の教えを説き始めるのです。

夫の両親は、嫌な顔もせず「そうか、そうか」とニコニコしながら彼女の話を聞いてくれたそうです。

そういう日が続いていくうちに、先生の中に微妙な変化が起るのです。

それは、四人の子供を立て続けに亡くされたにもかかわらず、両親の生活からはその暗さやわびしさが全然感じられないのです。しかも、都会育ちで田舎の習慣になじもうとしない彼女のような傲慢な嫁に対して両親は本当に親切にしてくれるのです。

さらに驚くべきことに、田舎の生活には珍しく、日の良し悪しや、占い、まじないといった迷信めいたことが全くなく、河村家の家訓として代々言い伝えられてきたことが、人間として一番大切なことはお寺に参って仏法を聴聞することだということです。そうして、「仕事は聴聞のあまりがけですればいい」というのです。

このような、仏さまを中心に穏やかな日暮らしを続ける両親を見ているうちに、お寺というのは一体どんなところなんだろという思いが生まれてきたのです。そこで先生は好奇心も手伝って生まれて始めてお寺を訪れることになるのです。

その時のお説教が、「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」というものでした。これは、阿弥陀さまの救いの目当ては善人

ではなく悪人だという、浄土真宗の教えの要（悪人正機）になるお話です。

これまで、善人は救われるが、悪人は裁かれると、キリスト教で教えられてきた先生にとって、初めて聞くこのお話は大きな驚きでした。

このことがきっかけになり、先生は次第に仏教の勉強を始めるようになりました。特に、クリスチャンとして守るべき戒律を中々守れない事に矛盾を感じていた先生にとって、自分の浅ましい心をごまかさず赤裸々にさらけ出していかれた親鸞聖人という方に、何ともいえない安堵感を覚えると同時に、強く惹かれるものがあつたのです。何としてもこのお念仏の道を極めたいと、方々のお寺に聴聞に出かけました。

しかし、その道は決して平坦なものではありません。聞けども聞けども心の底からうなずけるまでには至らないのです。純真で一途な先生は、いつそのこと離婚をして、家を出ても、このお念仏の道を求めていきたいと両親に願ひ出たこともありました。

そんな時、両親は「聞きたいという気持ちが起こったということは、もう仏さまのお手の中に抱かれているということだから、ともかく家のことも子供のことも一切私たちに任せて、気の済むまで、日本はおろかどこまででも行ってお聴聞してくるがいい」

と励ましてくれました。

こうして懸命に道を求める先生に、ついに阿弥陀さまのお心に出遭う時が来るのです。その時のことを次のように語っています

「いつものように理屈をこねながら聞いておりました私が、今まで思いもしなかったことに気付いたことがあります。自分が生きて自分が求めて、自分がこうして苦労しているんだと思っておりましたこの私というものが、自分で生きていくんじゃない、人間を超えた大きな大きなおかげさまで生かされている私だということに、フツと気付いた瞬間があります。本当にそれは瞬間なんです。ところが不思議でならないのはお念仏を唱えることが大嫌いだっただが、その時全く無意識のうちに「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と声に出してお念仏を称えていたのです。そうだったのか、呼ばれている身だったんだ、願われている身だったんだと、その時はつきり気付かせていただけなんです。その日は家に帰る道すがら、深い感動に襲われ涙が止まりませんでした」

「その日を限りに私がありがたい人間に

変わったのかと言いますと、私自身はちっとも変わってはいけません。傲慢でもあり、不遜でもあり、どうにもならない浅ましいものを抱えていることにはちっとも変わらないのです。けれども、その私にお念仏が出て下さることによって、のど元まで怒りがこみ上げた時には、我慢せよと慰めて下さる。道を間違えそうになった時には、危ないよと呼んで下さる。悲しみのどん底にある時には、共に泣いている親があることを忘れるなよと呼んで下さる。そんな、阿弥陀さまの呼び声であるお念仏によって導かれていく日暮しの安らかさというものを、私は知ることが出来たんです。本当にみ仏さまに出遭わせていただいたというのはそのことだと思えます。」

これが信心を頂いた念仏者の日暮らしというものです。よくよく味わっていただきたいと思えます。

こうしてクリスチャンから念仏者へと転じていかれた先生は、来し方を振り返り次のように語っています。

「私の人生で最もありがたかったことは姑（河村フデ）との出遭いでした。一字の読み書きも出来ない母でしたが、阿弥陀さまにすべてをおまかせすることを、身を以って教えていただいた方でした。決して説教じみたことや押し付けがましいことを言う人ではありませんでしたが、母は私を教化下

さるために、この世に出てこられた仏さまではなかったかと思えます」

まさに先生にとつて義母は善知識（仏法に導いてくれる善き師）でした。さらに、二人の出遭いの背後には、無数のご縁が、はたらいていたことを思う時、「たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」という親鸞聖人のお言葉を思い起こさずにはおられません。

★たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ

【意訳】

たまたま、お念仏のみ教えを喜ぶ身にさせて頂いたならば、それは我が思いを超えた遠い遠いはるかな昔からのご縁があつたのだと心から慶ぶべきです

★今回の法話は平成15年9月「テレフォン法話」で紹介したものです。

河村とし子先生は平成25年1月、91歳でご往生されました。



『新春法座』開催！



今年一番の寒さとなった1月10日(水)午後4時より、藤田徹文先生をお招きして恒例の新春法座を開催いたしました。厳しい寒さの中25名の参拝者がありました。

【講演主旨】

仏教には、宗派に関らず共通の教えがあります。これを三法印(四法印)と言います。三つの法(教え=真理)の旗印^{はたしるし}ということです。

一番目の旗印は「諸行無常」という教えです。これはあらゆるものは移り変わっていくということです。

諸行は特に「時間・いのち」を表します。「時間・いのち」が移り変わっていくということは、私たちが「生きる」のは、いつでも「今」しかないということです。「今、今、今、」の連続です、その過ぎ去ったところを昨日と言ひ、まだ来ぬところを明日と言っただけです。

つまり、「生きる」とは、「今を大事にする」こと以外ないということを教えているのです。ところが私たちは、ややもすると「今」をおろそかにして、「昔はよかった、昔はよかった」と過去に逃げたり、或いは「そのうち良いことがあるだろう」と大事な「今」から逃げたりと、そんな人生になっていることが多いと思います。これでは「生きる」ということを放棄していることになります。「諸行無常」とは与えられた「今」を大切に、精一杯生きていくことを教えているのです。

二番目の旗印は「諸法無我」です。あらゆるものには「我」がないということです。どんなものでも、周りと関わりを持たず、単独で存在するものはありません。ありとあらゆるものと関わりを持ってすべてのものは存在しているのです。その関わりを「縁」と言います。

私が存在するためには、どれほどの縁があるかと言えば、数えることは出来ません。文字通り無量の縁です。その無量の縁を頂いて、今この私は存在しているのです。

「諸法無我」とは私たちは無量の縁を頂いて生かされているんですよ、そのことを喜んでいきましょうと教えているのです。「無量」をインドの言葉で「アミダ」と言います。つまり、私たちは「アミダ」というハタラキ(無量の縁)を頂いて生きていけると言えるでしょう。

この二つの道理(諸行無常・諸法無我)に目覚めて生きていくことが出来れば、苦悩から解放され、おだやかで安らぎに満ちた「涅槃寂靜」(三番目の旗印)の人生を送ることが出来るのです。逆に、この道理に目覚めることがなければ、「あれが悪い、これが悪い」、「ああもされた、こうもされた」と、一切を「苦」と受け止めていく人生になってしまうのです。これを一切皆苦(四番目の旗印)と言います。

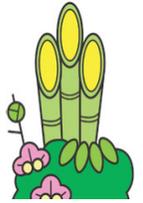
諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜の三つを三法印と言ひ、一切皆苦を入れると四法印と言います。この三つ(四つ)の旗印が仏教共通の教えです。そうしてこの道理が私たち人間世界の真理であります。

別離の年の出来事 2018年(平成30年)年回表

身近な人を亡くされた年には、どんな出来事があったでしょうか？改めて振り返ってみましょう。亡くなってから1年目の法事は1周忌、2年目は3回忌、6年目は7回忌、12年目は13回忌となっていくます。お法事は亡き人を偲びつつ、この私が仏縁に遭わせて頂くための大切な仏事です。

1 周忌 平成 29 年 (2017)	「北朝鮮、核ミサイル実験繰り返す」 1月ドナルド・トランプ氏米国大統領就任 5月獣医学部新設問題。 6月今上天皇退位特例法。テロ等準備罪法案成立。 7月北朝鮮 ICBM 発射日本上空通過。 10月衆議院選挙自民党圧勝。
3 回忌 平成 28 年 (2016)	「米国大統領広島訪問」 4月熊本地震発生。最大震度7。 5月G7サミット三重県伊勢志摩で開催。 6月公職選挙法改正により選挙権18歳に引き下げ 8月イチローMLB通算3000本安打達成。リオ五輪開催。
7 回忌 平成 22 年 (2010)	「スカイツリー開業」 5月日本で金環食観測。スカイツリー開業。 6月オウム真理教最後の逃亡犯高橋克也容疑者を逮捕。 9月尖閣諸島を国有化。中国全土で反日デモ発生。 10月ノーベル物理学賞、山中伸弥教授受賞。
1 3 回忌 平成 18 年 (2006)	「第1回WBCで日本初代王者」 2月トリノオリンピック開催。荒川静香金メダル 6月FIFA W杯ドイツで開催。 7月北朝鮮ミサイル7発発射。日本海に着弾。 9月秋篠宮夫妻に悠仁親王ご誕生。
1 7 回忌 平成 14 年 (2002)	「ユーロ流通開始」 1月ヨーロッパ統一通貨「ユーロ」開始。 4月「ゆとり教育法」施行。 9月小泉首相日本の首相として初訪朝。金日成、拉致認め、謝罪。5人帰国。 10月小柴昌俊・田中耕一の両氏ノーベル賞受賞。
2 5 回忌 平成 6 年 (1994)	「松本サリン事件」 6月松本サリン事件で7人死亡。 7月東向井千秋氏日本人女性初めてスペースシャトルに乗船。 9月関西国際空港開港。 10月大江健三郎氏ノーベル賞受賞。 12月ソニー・プレイステーション発売。
3 3 回忌 昭和 61 年 (1986)	「チェルノブイリ原発事故」 1月スペースシャトル・チャレンジャー号爆発乗組員全員死亡。 3月青函トンネル開通。 4月チェルノブイリ原発事故発生。 7月口富士フィルム「写ルンです」発売。
5 0 回忌 昭和 44 年 (1968)	「月面着陸」 1月東大安田講堂攻防激化。 5月ペルー大震災。 7月アポロ18号人類初の月面着陸に成功。 8月第51回全国高校野球決勝戦で松山商一三沢高が延長18回の引き分け再試合、翌日松山商優勝。

趣味の広場



俳句を楽しむ(七十六)

森本隆を

新年を迎えたと思つたらあつという間にはや二月。暦の上では立春も過ぎたというのにいまだに何十年に一度とかの寒さが続き、この辺では珍しく雪のちらつく日が多いこのごろです。インフルエンザも猛威をふるい、まだまだ冬の厳しい生活実感があります。皆さんはすこやかにお過ごしでしょうか。人それぞれのお正月であり一月であつたと思ひますが、今年もよろしくお願ひします。さて、今回は「平成俳句の総括・冬の部」と題して、勝手に印象的な何句かを取り上げましたが、今回は続いて「新年の部」として、年末年始の好句を見ていきたいと思ひます。

昨夜より浸せし昆布で節料理 星野 椿
塗碗を出して納めて松過ぎぬ 宇田喜代子
女性らしい台所俳句です。お正月を迎える家族のために暮の内からお節料理づくりに精を出し、久し振りに子供や孫もそろって賑やかだったお正月もまたたく間に過ぎ、食器の片づけが終るともう松の内も明けていた、という、まるで日記のように素直に詠んだ句です。

瑞雲を破り初日の昇りくる 寺田ひろし
半島の突端が見え初景色 藤本美和子
初景色旧知のごとき鳥が来て 河野 南睦
門松や東京の山みな遠嶺 小川 軽舟
正月の雪真清水の中に落つ 廣瀬 直人
新年をことほぐ俳句の見本のような五句です。いつも見馴れている光景でも、正月元日に朝一番で見ると、太陽も半島の先っぽの景色も遠くの山もすべて新鮮で、何となくお目出度い気分になっているように見えるものですね。庭先に来ている雀や空から舞い落ちる雪にまで何か歳の始めの雰囲気は漂っているかの如く感じます。昨日までと違った自分を感じ「さあ、今年は……」と自らのスイッチを切り変えて気分一新することも、人間にとって大切なことなのでしょう。

朝刊の折目折目の淑気かな 岡田 史乃
遠くから竹馬の子に呼ばれけり 藺草慶子
恵方道なりし雪掻きまだ済まぬ 山本一歩
お正月とは言え、ふだん通りの生活という一面も避ける訳にはいきません。新聞を取り出たり、雪深い場所に生きる人達は雪かきをして家や道路を守る事などは当たり前になければならないことです。子供は子供で元気に遊びまわります。しかし、そういうことの中にも、どこかお正月らしさは必ずあり、俳人達はその部分を感じてとらえて一句を成すのです。日常的で俗っぽい物事を、例えば新聞の折り目、子供らの遊ぶ姿、雪掻き作業、などをさりげなく詠みながら正月らしい気分を十分たてた句に仕上げています。

最後に、少し変わった角度から詠んだ新年の句を二句。

初富士や渾身で立つ一歳児 松男 隆信
車中にて赤子あやすも御慶かな 佐藤麻績
先ず一句め。渾身は「全身、身体のすべて」という意味です。人間の成長の過程のうち、這う、から、立つ、へ成長する一瞬を見事に句にし、しかも「初富士」という季語のイメージを重ね合わせた好句です。後の方の句は、電車に乗り合わせた他家の赤子がむずかっているのをあやし、これもお正月の挨拶ね、と新年らしく明るく詠んでいます。ベビーカーが乗り込むのを迷惑がったり、車中で他人のリュックを邪魔だと怒る最近の風潮を、大人として正面から論ずような句です。今回は新年の句をいくつかご紹介しました。俳句では「新年」も独立した一つの季節として扱い、年末年始をテーマに詠んだ句が全て新年の句ということになります。今回も私の独断で選んだ句でした。



位職書作品



【字句】 憍心自高則法水不入

【読み】 憍心、自ら高くすれば、すなわち法水入らず

【意味】 思い上がりの心を以ってしては、仏さまの教えを聞くことは出来ない

【出拠】 大智度論

- 本書は現在「本願寺出版社」月間売上第一位の本です。子どもたちの疑問を通して、浄土真宗の教えを学ぶ新感覚の浄土真宗入門書です。解説や豆知識も充実しており、いまさら聞けない大人にもおすすめの書です。
- 次のような構成になっています。
- 第1章 阿弥陀さま
- 1・宇宙と浄土、そして私
 - 2・信じるということ
 - 3・すくいのめあて
- 第2章 お釈迦さまと親鸞さま
- 1・お釈迦さま
 - 2・親鸞さま
- 第3章 阿弥陀さまが「いっしょ」(生活)
- 1・「まもられて」生きる
 - 2・「ありがとう」と生きる
 - 3・「仏さま」と生きる



BOOK
本

発行者 本願寺出版社
著者 藤間幹夫
定価 1296円(税込)



言葉のプレゼント

永遠に生きるかのように夢を持って
今日限りの命のように生きよ



おねはん

3月15日

1回目 9時～10時
2回目 11時～12時
3回目 13時～14時

★該当者にはご案内を差し上げています

光明寺のホームページ

南岳山光明寺

検索



「除夜の鐘」風景

「光明寺だより」をご家族の皆さんで
お読みください

★次回発行予定：7月中旬

★1月10日(水)午後4時より、藤田徹文先生をお招きして恒例の「新春法座」が開催されました。厳しい寒さの中25名の参拝者がありました。ありがたいことです。頭の下がる思いがいたします。

(*関連記事5ページ)

★大晦日の除夜の鐘には多くの参拝者がありました(上図参照)

★2月6日(火)「西条仏教青年会」主催の講演会が光明寺で開催されました。勝桂子女史の「心が軽くなる仏教とのつきあいかた」と題した講演でした。

★このほど、愛媛県では県内の著名な建築作品を観光の目玉にする観光事業(「瀬戸内近現代魅力発信事業」)が計画され、光明寺もその候補に挙げられています。

